徳川綱吉政権の武家地政策と幕臣編入家臣団の動向

RELATION BETWEEN SAMURAI LAND (BUKECHI) POLICY AND SHOGUN'S RETAINER
ADMISSION DURING TOKUGAWA TSUNAYOSHI GOVERNMENT PERIOD

岩 本 馨*

Kaoru IWAMOTO

Based on the residence movement records this paper analyses the samurai residence policy during the Edo Shogunate 5th General administration period, Tsunayoshi Tokugawa (1680 through 1709), a time when the city of Edo developed into a metropolis.

Tsunayoshi had an elder brother, the 4th Tokugawa Shogun Ietsuna, who adopted him. Since Tsunayoshi was the leader of the Tatebayashi clan, when he became Shogun his former vassals from the Tatebayashi clan were admitted as Edo Bakufu retainers. Here I will analyze these Samurai's residence lands. As a result I will show that even after the Tatebayashi clan was abolished, the former Tatebayashi clan's residence land were used as Edo Shogunate retainers land.

Keywords: samurai residence lands, Edo Shogunate, Tsunayoshi Tokugawa

武家地, 江戸幕府, 徳川綱吉

1. 問題の所在

近世巨大都市江戸のうち、7割弱の面積を占めていたのが武士身分の居住区としての武家地であった¹⁾。江戸は幕府の所在地であり、旗本・御家人のみならず、全国の大名とその家臣団も集住していたからである。これらの屋敷は原則として幕府から拝領したものであり、私有地とは異なり幕府の都合次第で強権的に没収・移動させられる可能性をもつものであった。それゆえ江戸における武家屋敷の配置のありようは、その時代の幕府政治の動向と連関するものであったといえる。

江戸屋敷に関する研究は、鈴木賢次や宮崎勝美らの基礎的な論考²⁾を嚆矢として、その後現在に至るまで多くの蓄積がなされてきているが³⁾、政治的動向と屋敷地との関係を検討した研究は乏しく、わずかに役屋敷の成立過程を追った松本剣志郎の論考⁴⁾が成果として見られるにとどまっている。一方で政治史の研究においても都市空間への意識は稀薄である⁵⁾。

こうした流れに対し、筆者はこれまで江戸幕府の政権交代にともなう屋敷地の変動について研究を行い、政治史と空間史との架橋を試みてきたが⁶⁾、政権の背後にはその時代固有の事情と論理がある以上、政治と空間との関係を安易に一般化して論じるのではなく、事例研究を重ねることで政権の武家地政策の差異を丁寧に評価して

いくことが必要であろう。

そこで本稿で取り上げるのは、5代将軍徳川綱吉政権下における江戸屋敷の動向についてである。綱吉は徳川将軍のなかで初めて前将軍（ここでは兄家綱）の養子となって将軍職を継承した人物であり、それ以前は上野「館林藩」（後述するようにこの「藩」は一般の藩とは異なる特殊な性格を有しており、その意味を込めて本稿では鉤括弧付きで示す）25万石の大名として独自の家臣団を擁していた。したがって綱吉の将軍家継承とは家臣団の幕臣編入という問題を必然的にともなうものとなる。この点は筆者がかつて論じた徳川家宣、および吉宗政権成立期の問題とも共通するが、従前の「藩」のありよう、旧家臣団の幕臣編入の過程、「藩」の存廃の有無など、事情はそれぞれ異なっていることにも注意しなければならない。そこで本稿では、綱吉が将軍であった延宝8（1680）年から宝永6（1709）年までを主たる検討対象として武家屋敷の動向を分析し、それをもとに綱吉政権の武家地政策の特質を、当該期の政治状況との関係に着目しつつ明らかにし、併せて家宣および吉宗政権期との比較を行いたい⁷⁾。

2. 将軍就任前の綱吉と家臣団

綱吉の前半生

まず綱吉政権について考える前提として、彼が将軍に就任するまで

* 京都工芸繊維大学工芸科学研究科デザイン・建築学系
講師・博士(工学)

Lect., Faculty of Design and Architecture, Kyoto Institute of Technology, Dr. Eng.

の動向について整理しておく。

綱吉は3代将軍徳川家光の五男⁸⁾として正保3(1646)年正月8日に生まれた。慶安4(1651)年4月3日、父家光の病が篤くなったことにともない、彼は三男長松(後の綱重)とともに厨料として15万石ずつを与えられ、家門大名として取り立てられている。さらに寛文元(1661)年閏8月9日には10万石を加増され、上野館林城を与えられた。ところが延宝8(1680)年4月、綱吉の兄の4代将軍家綱が重体に陥る。この時点で家綱に男子はなく、三男の甲府宰相綱重も二年前に歿していたことから、重臣の衆議の結果、5月6日に綱吉が家綱の養子として宗家を継ぐことに決し、翌日綱吉は二丸に入り、8月23日に5代将軍となったのである⁹⁾。

綱吉家臣団の形成とその構成

このように家綱の養子になる前の綱吉は25万石の家門大名だったのであり、したがって多くの家臣を抱えていた。綱吉家臣団の形成過程については深井雅海が詳細に考察しており¹⁰⁾、以下その論点を整理しておきたい。

綱吉への家臣附属は正保3(1646)年6月5日に小姓として5人の幕臣が付けられたのが初見である。その後順次人数は増加していくが、とくに三丸に屋敷を与えられた慶安元(1648)年と15万石を附与された慶安4年の両年にまとまった人数が附与されている。

こうして形成されてきた家臣団の状況を示す史料として、『館林殿之御事並御分限帳¹¹⁾』(以下『館林分限帳』と略す)が残されている。これは寛文3(1663)～4年頃の家臣団名簿であり、総人数は1,415人を数える。このうち氏名の記載のある522人が士分の家臣と考えられる。

これら家臣の役職別内訳を表1に示す。家臣団は大きく江戸神田上屋敷勤仕者と、館林勤仕者とに分けられ、このうち前者が500人(95.8%)と圧倒的多数を占めていた。綱吉自身、居城である館林城に入ったのは、『常憲院殿御実紀』に見る限り寛文3年5月のただ一度のみであり、江戸に常住していた。

神田上屋敷に勤仕する家臣の筆頭は年寄室賀下総守(正俊)6,000石で、彼を含む年寄衆と、奏者衆・用人衆が家臣団の上層部を占めた。これに加え、書院番・小姓組・小十人組などの番方、勘定・納戸・右筆などの役方、小姓・小納戸などの近臣の役職が見え、幕府

表1 『館林分限帳』に見える氏名記載家臣の役職

神田上屋敷勤仕者				館林勤仕者	
役職	人	役職	人	役職	人
年寄衆	6	小姓	19	蔵奉行	4
奏者衆	5	表小姓	12	下屋敷留守居	1
用人衆	7	小納戸	10	医師	10
留守居衆	2	小姓組	49	馬方	5
書院番頭	5	書院番	58	伯楽	2
小姓組番頭	5	広敷番頭	4	鷹師	7
鎗奉行	2	納戸組頭	4	同朋	2
持筒弓頭	6	弓役	2	小普請	22
先手弓鉄砲頭	6	鉄砲役	2	破損奉行	4
目付衆	8	小十人組頭	5	大奥メ切番	4
使役	9	賄頭	2	広敷添番	8
書院番組頭	5	金奉行	2	徒組頭	5
小姓組組頭	5	納戸	4	徒目付	19
徒頭	5	右筆	6	火之番	9
小十人頭	5	領分廻り	2	中間頭	2
勘定頭	2	台所頭	2	台所方	15
寄合	1	小十人組	64	茶道方	1
納戸頭	8	勘定	23	坊主頭	3
腰物奉行	3	書替役	2	大工頭	2
裏門番頭	4	吟味奉行	3	神田館計	500
				館林計	22

組織を縮小したような構成となっていたことがわかる。一方館林勤仕者は城代大久保荒之助(忠辰)3,000石を筆頭とした士分は22人に過ぎず、ごく少数の陣容で国元の支配にあたっていた。この館林勤仕者も原則的には交代で派遣されていたようで、たとえばやはり綱吉時代の館林城下を描いている「館林御城図¹²⁾」において屋敷の拝領者名を見ると、『館林分限帳』記載の22人のなかで確認できるのは添城代本多甚左衛門(重盛)、町奉行山川角之丞(忠光)など6人に過ぎないことがわかる。館林の武家地には「明地」の記載が目立ち、武士の存在が稀薄な城下の様相がここからも窺える。これが「館林藩」が一般の藩と異なる第一の特殊性である¹³⁾。

第二の特殊性として、深井は「館林藩士」の知行のあり方を指摘している。すなわち、『館林分限帳』で氏名の判明する522人のうち、親子の重複を除き『寛政重修諸家譜』(以下『寛政譜』と略す)で記載の確認できる469人の前歴を調べると、約6割の293人が幕臣またはその子弟からの附属であったことがわかる(ほかは元大名家臣、綱吉縁故者、浪人など)。そしてこのうち館林城を与えられた寛文元(1661)年以前に附属された家臣は、それ以前に幕府から与えられていた本領を、それが「館林藩」領外であっても割替されることなく保持していたという。したがって、彼ら幕臣出身の家臣は、形式上は「藩士」でありながらも、なお「幕府からの出向者のような存在¹⁴⁾」でもあるという二重性を帯びていたのである。

館林家屋敷と「藩士」の江戸屋敷

この特殊性を屋敷の面からも検討してみたい。綱吉の最初の屋敷は一橋門内にあり、慶安4(1651)年7月5日に拝領している(『日記』、6-674¹⁵⁾)。ただしこの屋敷は明暦の大火で被災し、明暦3(1657)年3月3日に神田橋門内に移され(『明暦日記』、7-164)、以後上屋敷となった。この上屋敷のほか、慶安5(1652)年8月14日に小石川白山に下屋敷を(『公儀日記』、6-760)、万治3(1660)年に本所石原に蔵屋敷を拝領している(「南本所石原町書上」、7-328)。

綱吉の家臣団も基本的にはこれらの屋敷内に居住していたものとみられ、上屋敷が万治4年2月4日に(『柳営日記』、7-1059)、下屋敷が寛文2(1662)年8月14日と同9年8月10日に添地を拝領して敷地を拡張しているのは(『公儀日記』、8-52／『柳営日記』、8-777)、家臣団の増加に対応したものであろう。

しかしこれには例外がある。『館林分限帳』と近い時期の江戸図として、「新板江戸大絵図」・「新板江戸外絵図」(寛文10年～13年、いわゆる「寛文図」)があるが、分限帳の人名を検索すると、522人中40人の名前が発見される(表2)。すなわち彼らは館林家屋敷内ではなく、幕臣と同様に独立した屋敷を拝領していたことになる。

その内訳をもう少し詳しく見たい。まず年寄衆では6人中5人、奏者衆では5人中2人、用人衆は7人全員が独立した屋敷を確認できる。このうち年寄衆で名前の見えない大久保和泉守(正朝)については養子で幕臣の名跡を継いだ八郎左衛門(忠隆)の屋敷が確認でき、奏者衆で名前の見えない3人はいずれも親兄弟が綱吉家臣で独立した屋敷を拝領していることから、彼らもそこに同居していたと考えられ、したがって年寄衆・奏者衆・用人衆ら上層部の家臣は基本的に館林家屋敷外に居住していたことがわかる。

彼らよりも下位の家臣になるとそうした例は少なくなるが、確認できる家臣の履歴をみるとその大部分は幕臣からの附属者であり(表1において附属年が**ゴシック**となっている家臣)、おそらく幕臣時代

表2 「寛文図」で確認される『館林分限帳』所載家臣一覧

順	名前	役職	家禄高	附属年	屋敷地
1	室賀下總守正俊	年寄衆	6000石	慶安元	小石川門内
2	曾我伊賀守包助	年寄衆	5000石	万治3	水道橋外
3	(本庄宮内少輔道芳)	年寄衆	4000石	慶安元	小川町
5	黒田信濃守用綱	年寄衆	3000石	寛文元	番町
6	杉浦大隅守政清	年寄衆	3000石	寛文元	小石川
7	牧野兵部成貞	奏者衆	2500石	万治3	本所
11	金田与三左衛門正勝	奏者衆	300俵	寛文元	市谷
12	前田孫市郎定次	用人衆	1700石	正保3	牛込
13	戸田七内政次	用人衆	1700石	正保3	番町
14	栢植平兵衛正弘	用人衆	1700石	正保3	小川町
15	押田三左衛門直勝	用人衆	1700石	慶安元	番町
16	向坂清左衛門政定	用人衆	1600石	正保3	番町
17	植村五郎八	用人衆	1100石	慶安元	番町
18	山本七郎左衛門正信	用人衆	1300石	慶安元	駿河台
22	大久保新蔵包教	書院番組頭	650俵	慶安元	牛込門内
31	武嶋四郎右衛門茂信	鎗奉行	600俵	寛文2	小日向
35	伏見助左衛門為景	持筒弓頭	500俵	慶安元	内藤宿
41	中根九郎兵衛正連	先手弓鉄砲頭	550俵	寛文2	牛込
45	美濃部十右衛門茂之	目付衆	450俵	慶安4	本所
52	鈴木甚之助重元	目付衆	450俵	慶安4	番町
55	小佐手五左衛門信忠	使役	500俵	寛文2	小日向
64	川窪善左衛門信本	書院番組頭	不明	不明	牛込
66	(石野弥五左衛門祐正)	書院番組頭	300俵	慶安4	駿河台
82	平野与左衛門勝貞	勘定頭	500俵	慶安4	小石川門内
83	柳沢刑部左衛門安忠	勘定頭	165石	不明	市谷
94	仙波弥市左衛門永清	腰物奉行	220俵	慶安4	番町
110	前田新八郎定相	小姓	250俵	(二世)	番町
115	原田友之助種久	小姓	200俵	(二世)	牛込
118	細井喜太郎正貞	小姓	200俵	不明	本所
136	酒依九兵衛	小納戸	250俵	不明	番町
139	三嶋五左衛門政房	小納戸	250俵	不明	番町
161	岩間源三郎正平	小姓組	220俵	慶安4	市谷
171	石原太郎左衛門正次	小姓組	220俵	慶安4	四谷
203	山田友右衛門重時	書院番	207俵	不明	湯島
217	山本五郎左衛門正次	書院番	200俵	不明	小石川
227	三宅三十郎正永	書院番	200俵	不明	半蔵門外
234	植村庄兵衛正矩	書院番	200俵	不明	番町
353	辻源五右衛門守壽	蔵奉行	不明	不明	本所
413	(石原太郎兵衛吉次)	小普請	200石70俵	慶安元	四谷
501	大久保荒之助忠辰	館林城代	3000石	寛文3	番町

「順」は『館林分限帳』の記載順。括弧付きの人名は「寛文図」時点で故人で後継者の人名が見えるもの。附属年が**ゴシック**となっているのは幕臣からの附属を示す。

の拝領屋敷をそのまま保持していたものと考えられる。また新規附属家臣の例ではいずれも慶安4年という初期の附属者であり、これは深井がすでに指摘しているように、「寛文元年閏八月九日に綱吉が上州館林二万五石を与えられるまでは將軍家の「家族」同様に扱われ、附属家臣も幕臣同様に扱われたことを物語るもの¹⁶⁾」であろう。先述したような幕臣出身家臣にみられる「藩士」と幕臣との二重性は、屋敷の面でもまた確認できるのである¹⁷⁾。

3. 綱吉政権期の屋敷移動

綱吉政権の成立

すでに触れたとおり、綱吉は延宝8(1680)年5月7日に兄家綱の養子として江戸神田上屋敷から江戸城二丸に入っている。翌5月8日に家綱は薨じているから、この日から綱吉が急死する宝永6(1709)年正月10日までの28年半ほどが実質的な綱吉政権期といえることができる。以下ではこの時期の江戸における武家屋敷の動向について分析を行いたい。

分析のための史料

当該期間の屋敷収受について知るために、本稿では以下のような史料を使用してデータベースを作成した。

- ① 屋敷渡預絵図証文(以下『屋敷証文』とする)：旧幕引継書の一つで、江戸において屋敷を拝領した者または預けられた者が幕府普請奉行所に提出した証文である。ここから当該屋敷地の地名・

敷地周辺図(隣接屋敷の拝領者名も含む)・敷地坪数・旧拝領者名・新規拝領者名・日付などの情報が判明する(一部建築についての情報を含むものもある)。国立国会図書館には計304冊が現存するが、原証文を綴じたものと写本との二種類が確認される(内容は同一)。綱吉政権期では天和元(1681)年～3年、元禄10(1697)年の本所の部¹⁸⁾、同11年6月、同年9月の一部に欠落がある。また役屋敷収受は作成対象外であったとみられ、当該証文は確認できない。

- ② 屋敷書抜：同じく旧幕引継書の一つで、年ごとに屋敷収受の一覧を書き留めたものである。国立国会図書館には寛文12(1672)年～文久3(1863)年までの62冊と、これを再整理した寛文12年～安政7(1860)年までの49冊が現存する。内容は『屋敷証文』の抜粋といえるが、こちらには元禄11年6月・9月の記事も見えるので、欠落部分を補うことができる。

- ③ 御府内往還其外沿革図書・御府内場末往還沿革図書(以下『沿革図書』、『場末沿革図書』とする)：普請奉行の編による江戸の地域変遷図で、前者は全15巻計168区画、後者は全8巻計479区画からなり、江戸のほぼ全域をカバーする(一部欠落あり¹⁹⁾)。こちらは時期ごとの屋敷の位置が判明するので、証文類と照合させることで屋敷地を具体的に比定させることができる。なお写本は国立国会図書館・国立公文書館内閣文庫・東京都立公文書館に残るが、本稿では『沿革図書』については都立公文書館本をもとにした『江戸城下変遷絵図集』(原書房、1985-87年)を、『場末沿革図書』については国立国会図書館本(ただし欠落の第18巻は内閣文庫本を、本所之部は都立公文書館本)をそれぞれ利用した。

以上3つを基本史料として、これに『東京市史稿』市街篇に収録される屋敷収受関係記事(①・②の翻刻も含まれる)で遺漏分を補い、またこれらを寛政譜での幕臣の履歴と照合させることで、綱吉政権下において、どのような立場の幕臣が、いつどこにどのような規模の屋敷を得たのかの動向を追うことができる。この間の新規拝領・屋敷移動の総件数は5,043件(場所記載分、大縄拝領屋敷は単位ごとに1件と数える)に及び、江戸の武家地では直参の幕臣屋敷の4分の1弱が入れ替わるほどの大規模な流動があったことがわかる²⁰⁾。

屋敷収受の動向

以下では作成したデータベースにもとづき、政権の意向がとくに反映していると考えられる屋敷収受の動向について摘記する。

- ① 延宝8(1680)年～9年(天和元年)：この時期には、延宝8年8月9日に馬場先門内にて牧野備後守成貞が屋敷を拝領したのを皮切りとして、綱吉に供奉して幕臣化した家臣の屋敷拝領が散見される。この問題については次節で詳しく検討したい。
- ② 天和2(1682)年：この年で注目されるのは、本所からの撤退にともなう屋敷地の移動である。すなわち、綱吉は天和2年3月14日に「本所に宅地ある輩。常に水患をくるしむよし聞ゆれば。府に転換せん事をのぞまば。ゆるさるべき旨令²¹⁾」を発し、万治元(1658)年頃から市街化が進んでいた本所からの撤退策を打ち出した。「本所住宅御替地拝領之衆」(9-1108～1130)にはこのときの屋敷替が書き上げられているが、ここに見える大

表3 本所からの移転先

移転先	旧拝領者	人数
半蔵門外	松平越後守光長	40
青山	青山大膳亮幸利	36
麻布	松平三河守綱国	20
築地	渡辺大隅守綱貞	11
小石川	真田伊賀守信利	10
浅草	堀田豊前守正休	8
その他		25
計		150

- 縄拝領屋敷を除く150人の移転先を整理すると表3のようになる。ここで最も多い半蔵門外と三番目に多い麻布の屋敷は、延宝9年の越後騒動で改易となった松平光長・綱国父子の元屋敷であった。四番目に多い築地も同じく越後騒動に連座した渡辺綱貞の元屋敷、五番目の小石川は御家騒動のために天和元年11月22日に取り潰された真田信利の元屋敷であり、このときの屋敷割替には改易大名の屋敷が用地として活用されていたことが窺える。
- ③ 貞享5(1688)年(元禄元年)：この年に入ると綱吉は本所撤退策を放棄し、再び市街化が始まる。3月5日に15人が本所に屋敷を拝領しているのが初見であるが(『天享吾妻鑑』、10-746)、これ以降元禄期にかけて数度にわたりまとまった割付を確認できる。
- ④ 元禄4(1691)年：2月10日夜、麴町で火災が発生し、周辺の町家と武家屋敷に被害が及んだ(11-304)。これを契機として幕府は麴町通り南側一帯を収公して火除地としている。『屋敷証文』では2月中に計23人の幕臣が替地を受領しているが、その全てが本所で、かつ1人を除いて元坪にボーナス(諏訪因幡守忠晴は300坪増、ほか100坪増)が加算されている。このように先に述べた本所の再開発は江戸の防火対策とも関連していたのである。
- ⑤ 元禄6(1693)年：2月に本所において幕臣計188人への大規模な屋敷給賜が確認される(『屋敷証文』、11-531～575)。本所地域の再開発がいつそう進展したことがわかる。
- ⑥ 元禄7(1694)年：6月に小石川において御家人計56人のまとまった拝領が確認される(『屋敷証文』、12-74、80～82、105～109)。これは鷹匠同心組屋敷の跡地であり、前年に生類憐れみの令の一環として鷹方が廃止されたことによるものであった。
- ⑦ 元禄10(1697)年：10月23日、綱吉は松平出羽守綱近に助役を命じ、北丸の築造を開始する。これにより、建設予定地にあった屋敷は全て移転されている。またこの年の動向で注目されるのは、11月14日引渡の内藤宿内藤丹後守清牧元屋敷におけるまとまった屋敷給賜で(『屋敷証文』、13-483～492)、このとき拝領した43人全員が寄合または小普請、すなわち無役の幕臣であった。証文には「元屋敷御用地ニ被 召上候為御代地」とあり(元屋敷にとくに共通性は認められない)、いわば余剰人員である無役幕臣を場末の地に集中させるという綱吉政権の意図を読み取ることができる。生類憐れみの令との関連では、11月23日に大久保にて大番12人に屋敷が引き渡されているが(『屋敷証文』、13-504～507)、これは手狭のため同月に閉鎖された犬御用屋敷の跡地を分割したものであった。
- ⑧ 元禄14(1701)年：深川地域の再開発は本所に比べると遅れ、元禄13年以前までの拝領事例は計10件を確認できるのみであったが、この年には計56件が確認でき、深川の武家地化が一挙に進んだことがわかる。
- ⑨ 元禄17(1704)年(宝永元年)：前年11月29日に発生した大火を受けて、4月15日に本郷御弓町にあった先手組屋敷を関口・駒込・本所の三箇所に移転させ、その跡地に新たに屋敷地を割り出している(『天享吾妻鑑』、15-626)。これも災害を契機とした武家地の再編の例といえる。
- ⑩ 宝永元(1704)年～5年：綱吉には後継の男子がなかったことから、12月5日に甲府家の綱豊を養子とすることを決定する。これにともない綱豊家臣団も幕臣に編入されるが、12月11日に間

部越前守詮房が馬場先門内に屋敷を拝領したのを皮切りに(『屋敷証文』、15-792)、以後幕臣化家臣団の屋敷拝領が散見される。この過程についてはすでに筆者が別稿にて論じている²²⁾。

小結

以上、綱吉政権期における屋敷収受の動向を概観したが、武家地の拡大にともない、隅田川左岸地域(本所・深川)や小石川・内藤宿・大久保などの江戸周縁部の開発が進展してきたこと、大火などの災害が武家地の再編の契機となっていたこと、生類憐れみの令をはじめとする政策が屋敷流動とも関連していたことなどがわかった。そこで次に検討すべきは、綱吉の将軍就任にともなって幕臣化した綱吉家臣団の屋敷地の動向がこうした全般的動向とどのように関連していたかという点である。以下、節を改めて検討したい。

4. 幕臣編入家臣団の屋敷地動向

綱吉家臣団の幕臣編入と「館林藩」

延宝8(1680)年の綱吉の将軍就任は家臣の幕臣編入をともなったが、しかしそれは「館林藩」の廃藩を意味するものではなかった。『常憲院殿御実紀』によれば、「潜邸(引用者注：神田上屋敷)は徳松君相統せられ。封地。家人もありしまゝたるべしと仰出され²³⁾」とあるように、「館林藩主」の座は綱吉の二歳になる男子が継承したからである。これには、家綱臨終の時点でお彼の側室に懐妊の噂があり、若君誕生の可能性が残されていたためであり²⁴⁾、将軍綱吉は当初はあくまで中継ぎという建て前であった。それゆえ7月10日に綱吉が本丸に移ったときに供奉して幕臣となったのは彼にごく近い家臣数十人にとどまったのである。

その他の家臣はなお「館林藩士」として徳松に仕えることとなったが、家綱の遺児誕生の可能性がほぼ消滅した11月に入ると、徳松はようやく将軍継嗣と決し、27日に西丸に移り「若君」と呼ばれるようになった。この日から徳松家臣団も西丸の勤仕することとなって幕臣に編入されるが、その後も「館林藩」は廃藩にならず、彼らは徳松が亡くなる天和3(1683)年までは幕臣でもあり「館林藩士」でもあるという二重性を有していたことに注意しなければならない²⁴⁾。

幕臣編入家臣団の屋敷拝領

こうした二重性は屋敷拝領においても表れている。表4は徳松卒去以前の綱吉家臣団の屋敷拝領事例を整理したものである。これによると拝領件数は38で、延べ35人が拝領を受けている。このうち33人が延宝8(1680)年に綱吉に供奉して本丸入りした幕臣に相当する。彼らのなかで、それ以前から拝領屋敷を有していたことが確認されるのは6人のみで、ほかは新規拝領であったと考えられる。また前拝領者の履歴を確認すると、表に挙げられた屋敷の過半数が改易にともない収公されたものであったことも注目される。深井の論考によれば、『寛政譜』に記載が見える幕臣編入家臣団は488家528人におよび、このうち延宝8年に幕府の役職に就いた本丸勤仕者は61人であったこと²⁵⁾を考えると、本丸勤仕者の全員がすぐに屋敷を得られたわけではなく、また彼らへの屋敷割り当ても、改易などで明屋敷が発生したところにそのつど充填していくような、受動的な方法がとられていたことが読み取れる。

徳松に附属され西丸に勤仕していた幕臣の屋敷拝領事例はいう少なく、該当期間では本庄因幡守宗資と柘植五太夫正信の2人を

確認できるのみである。彼ら西丸勤仕者は先に述べたように幕臣に編入されていながらなお形式的には「館林藩士」でもあり、したがってなお存置されていた館林家屋敷を居住の場としていたと考えられる。本丸勤仕者であっても拝領屋敷を確認できない家臣もまた同様であったろう。

徳松死後の旧「藩士」と元屋敷

徳松は天和3（1683）年閏5月28日に5歳で卒去する。これにともない、「館林藩」は廃藩となり、徳松旧臣は「藩士」との二重性を脱して純粋な幕臣となる。しかし、延宝8（1680）年に綱吉に供奉して本丸入りした家臣が幕臣編入後に將軍近臣や実務吏僚として登用されたのに対し、このときの徳松旧臣は西丸側衆と徒・坊主を除く全員が6月19日付けで小普請入りとされており、この「編入」に対する綱吉政権の積極的姿勢は見えにくい。それゆえ旧「藩士」は徳松の死により二重身分状態を脱したにもかかわらず、そのことは必ずしも新規屋敷拝領の契機とはならなかったのである。実際、その後の屋敷収受の動向を見ると、彼らのまとまった屋敷拝領としては以下の事例が確認される程度にすぎない。

- ① 元禄元（1688）年12月：本所の旧蔵屋敷跡およびその周辺で代官・勘定23人が屋敷を受領している（『屋敷証文』、10-948、963～980）。
- ② 元禄6（1693）年2月：本所において番医1人、代官3人、右筆5人、勘定12人、二条蔵奉行1人、小石川御殿奉行1人の計23人が屋敷を受領している（『屋敷証文』、11-535、538～575）。
- ③ 元禄7（1694）年6月：小石川鷹匠同心組屋敷跡において広敷番頭1人、広敷添番2人、三丸広敷添番2人、宝蔵番1人、天守番3人の計9人が（『屋敷証文』、12-74～75、80～81、105～109）、本所において代官2人、勘定2人、小普請1人の計5人が（同上、12-84～88、91～92）それぞれ屋敷を受領している。
- ④ 元禄11（1698）年2月：小石川白山において番方12人をはじめ旧「藩士」計20人が屋敷を受領している（『屋敷証文』、13-643～648、653～654）。
- ⑤ 元禄14（1701）年10月：内藤宿において大番8人が、小石川白山において大番3人、小十人2人がそれぞれ屋敷を受領している（『屋敷証文』、14-899～903）。後者の場所では12月にも大番4人、小十人2人が屋敷を受領している（同上、14-962～965）。

ここで見られる割り当て地は本所や小石川といった周縁部にあり、また役職ごとに一定のまとまりが確認される。この点は前節で見た全般的な傾向とも共通する。ただし期間内で確認される拝領者は『寛政譜』で確認できる528人よりもずっと少なく、また幕臣化を果たしたからのタイムラグも長い。したがって綱吉政権は、徳松の死＝館林藩廃藩以後も、原則として元屋敷を旧「藩士」の居住の受け皿とする政策を維持したとみるべきであろう。以下、それぞれの元館林屋敷がいかに活用ないし再編されたかについて検討したい。

表4 徳松卒去以前の綱吉旧家臣団の屋敷拝領

#	市史稿	拝領または引渡日	拝領地	坪数	名前	役職	家禄高
1	9-625	延宝8・8・9拝領	馬場先門内	不明	牧野備後守成貞	側衆	13000石
2	9-634	延宝8・9・朔拝領	西丸下	不明	荒川長門守重好	小姓	200俵
3	9-634	延宝8・9・朔拝領	小川町	904.9	有田伊勢守光明	小姓	250俵
4	9-634	延宝8・9・朔拝領	小石川	1525.5	松平佐渡守忠重	小姓	250俵
5	9-635	延宝8・9・朔拝領	西丸下	不明	曾我土佐守助格	小姓	500石
6	9-635	延宝8・9・朔拝領	西丸下	不明	大井甲斐守昌信	小姓	200俵
7	9-635	延宝8・9・朔拝領	牛込	726	服部庄三郎貞世	小納戸	450俵
8	9-635	延宝8・9・朔拝領	小石川門内	467.6	河内半兵衛常政	小納戸	270俵
9	9-635	延宝8・9・朔拝領	四谷	632.9	石原太郎左衛門正次	小納戸	300俵
10	9-635	延宝8・9・朔拝領	小石川	593.85	飯塚喜兵衛重方	小納戸	220俵
11	9-635	延宝8・9・朔拝領	小石川	466	花村三郎兵衛正親	小納戸	200俵
12	9-635	延宝8・9・朔拝領	番町?	不明	長山弥三郎直利	小納戸	250俵
13	9-635	延宝8・9・朔拝領	小日向	498	山口五郎兵衛光久	小納戸	500俵
14	9-635	延宝8・9・朔拝領	赤坂	不明	加藤源太左衛門正岑	小納戸	250俵
15	9-642	延宝8・10・晦拝領	元飯田町	不明	若藤空右衛門高豊	馬方	150俵
16	9-642	延宝8・11・6拝領	西久保	1858.4	林相模守直秀	小姓	500俵
17	9-691	延宝9・4・2渡	清水門外	720.4	依田三右衛門守安	三丸附	400俵
18	9-691	延宝9・4・2渡	清水門外	720.4	山本五郎左衛門正次	三丸附	300俵
19	9-692	延宝9・4・6拝領	神田橋門内	不明	金田遠江守正勝	側衆	3000石
20	9-692	延宝9・4・6拝領	駿河台	788.2	喜多村安斎直明	奥医	500俵
21	9-692	延宝9・4・6拝領	筋違橋門内	660	岡了節正久	奥医	250俵
22	9-692	延宝9・4・6拝領	筋違橋門内	605	箕浦壽玄某	—	150俵30口
23	9-692	延宝9・4・6拝領	筋違橋門内	550	高麗春沢長好	奥医	350俵
24	9-692	延宝9・4・6拝領	龍之口	不明	本康宗碩徳長	奥医	100俵20口
25	9-696	延宝9・5・13拝領	浜町	不明	牧野備後守成貞	側衆	13000石
26	9-728	延宝9・7・11拝領	神田橋門内	不明	美濃部勘兵衛茂清	小納戸	800石
27	9-728	延宝9・7・11拝領	外桜田門外	不明	太田伝八郎資昌	小納戸	500石
28	9-728	延宝9・7・11拝領	西久保	1483.1	柳澤弥太郎保明	小納戸	830石
29	9-729	延宝9・7・11拝領	愛宕下	922.3	山口五郎兵衛光久	小納戸	800石
30	9-736	延宝9・8・3渡	四谷門内	127.6	後藤意伯正経	小納戸坊主	不明
31	9-739	延宝9・9・14渡	牛込	649.88	野辺権大夫当武	小納戸	200俵
32	10-1	天和2・4・3拝領	馬場先門内	不明	牧野備後守成貞	側用人	33000石
33	10-5	天和2・5・23拝領	小川町	不明	★本庄因幡守宗資	—	2000石
34	10-51	天和2・11・15拝領	神田橋門内	300	井出三郎兵衛正易	三丸広敷番頭	200俵
35	10-51	天和2・11・15拝領	神田橋門内	不明	上野半左衛門景包	三丸広敷番頭	200俵
36	10-51	天和2・11・15拝領	神田橋門内	不明	青木小左衛門政之	三丸広敷番頭	200俵
37	10-777	天和3・2・12拝領	赤坂	不明	★柘植五大夫正信	徳松抱傳	1500石
38	10-110	天和3・閏5・朔拝領	不明	不明	松野六郎兵衛親冬	小納戸	600俵

ゴシックの拝領地は改易にともなう明屋敷、ゴシックの人名は初めて江戸に屋敷を拝領したと推定される人物、★印の家臣は徳松附属家臣を示す。屋敷坪数は『屋敷証文』、役職・家禄高は『寛政譜』による。

神田上屋敷

神田屋敷は館林家の上屋敷であり、綱吉の住居と政務空間がその中心的な機能であったと推定される。この屋敷は綱吉の將軍就任後は「藩主」徳松に継承されたが、徳松自身はその後西丸に入り、家臣たちもそちらに勤仕したことから、事実上留守邸となっていたと考えられる。実際、徳松在世中の延宝9（1681）年7月に江戸城二丸の工事が行われたさいには神田御殿が移されたとの記録も残る²⁶⁾。ただし、その翌天和2（1682）年10月27日に綱吉が「神田の御殿に入らせらる²⁷⁾」こともあるので、移築後も御殿としての機能は保持していたのであろう。

天和3年の徳松の死により「館林藩」が廃藩となってからは、神田御殿番の職名がみえる²⁸⁾ ことなどから、この屋敷は幕府の御殿として引き継がれたと考えられる。上屋敷時代および幕府御殿時代に、どれほどの（旧）「藩士」が居住していたかは史料がなく不明とせざるを得ないが、元禄13（1700）年8月2日に柳沢出羽守保明が神田御殿の地を拝領していることから（『柳沢保山一代記』、14-487）、遅くともそのときまでに全員が退去したものと考えられる²⁹⁾。

小石川白山下屋敷

小石川白山の下屋敷は現在の東京大学理学系研究科附属植物園（小石川植物園）とその北東の住宅地付近にあり、前者の部分の土地利用の変遷については渋谷菓子による考察がある³⁰⁾。

第2節で述べたとおり、綱吉がこの地に下屋敷を拝領したのは慶安5（1652）年であり、その後寛文2（1662）年と9年に添地をして

表5 元禄11年時点の小石川白山屋敷跡拝領者

#	屋敷受領日	拝領者	元禄11年時点での役職	家禄高
①	—	坂入半之丞重信	台所頭	200俵4口
②	—	岩沢六左衛門教久	不明	不明
③	—	中村庄兵衛尚善	小普請方上役／表火番／奥火番	不明
④	—	深沢仁左衛門正勝	勘定	不明
⑤	—	岡室弥五兵衛政徳	三丸広敷書役／三丸広敷吟味役	不明
⑥	—	大塚太右衛門信光	三丸台所人	不明
⑦	—	中村三郎左衛門勝行	新番	250俵
⑧	—	三浦兵十郎元勝	小十人	200俵
⑨	—	窪田善兵衛某	小十人	150俵
⑩	—	山下太郎右衛門義方	小普請	200俵
⑪	元禄11・2・26	西尾権八郎政蒔	勘定	100俵3口
⑫	元禄2・2・18	藤井喜右衛門正平	三丸賄方／三丸賄方組頭	不明
⑬	—	由田伝右衛門清信	三丸広敷添番	200俵
⑭	—	石原甚之助義方	大番	200俵
⑮	元禄2・2・18	石原与兵衛正盈	勘定	100俵3口
⑯	—	向坂庄兵衛正勝	三丸賄頭	200俵
⑰	—	伏見金右衛門景光	神田普請小屋同心頭	500俵
⑱	—	田沢弥左衛門某	三丸張番	不明
⑲	—	菅浪甚三郎武弘	西丸裏門番与力	不明
⑳	元禄7・8・12	志村又兵衛正光	三丸広敷添番／三丸張番	不明
㉑	—	小林新六郎幸般	三丸台所人	不明
㉒	元禄2・2・18	萩原長左衛門宣久	小普請	現米120石
㉓	元禄7・8・12	成海佐左衛門某	三丸広敷添番	不明
㉔	—	神山伝左衛門(伝兵衛信豊?)	三丸台所人	不明
㉕	—	小野七郎兵衛直救	三丸台所人	不明
㉖	—	川合五右衛門正房	表火番／広敷添番／壽光院添番	不明
㉗	元禄3・4・8	神尾善右衛門正静	三丸広敷添番	不明
㉘	—	鈴木徳之進某	元牧野成貞家臣、大番	300俵
㉙	—	壺井源左衛門重時	小普請	350俵
㉚	—	美濃部勘右衛門茂敦	勘定	100俵
㉛	—	服部源之丞弘儀	表奥火番	不明
㉜	—	近藤甚左衛門正定	未襲封	450俵
㉝	—	佐野彌次兵衛頼方	表奥火番／瑞春院方広敷添番	不明
㉞	—	西与一左衛門某	代官	150俵
㉟	—	多喜市平(次郎大夫資友?)	勘定	100俵3口
㊱	—	大石四郎左衛門(甚五右衛門道広?)	大番	220俵
㊲	—	中嶋助四郎(助六郎資将?)	小石川御殿奉行	200俵
㊳	—	山下一学義知	大番	500石
㊴	元禄3・11・16	江馬平左衛門雅次	大番	300俵
㊵	—	平井吉左衛門正則	小間遣頭	不明
㊶	—	長井三郎兵衛忠昌	小普請	220俵
㊷	元禄2・2・18	間宮与四郎政長	小十人	200俵
㊸	—	筒井武左衛門(武右衛門政朝?)	桐間番	250俵

番号は図1と対応。白抜き番号は旧「館林藩土」を示す。屋敷受領日は『屋敷証文』、拝領者の諱・役職・家禄高は『寛政譜』による。

図1 元禄11年頃の旧小石川白山屋敷／図2 元禄6年頃の旧本所屋敷

表6 元禄6年時点の本所石原屋敷跡拝領者

#	屋敷受領日	拝領者	元禄6年時点での役職	家禄高
①	元禄6・2・6	石原与兵衛正盈	勘定	100俵3口
②	元禄6・2・6	宮重彦右衛門信清	勘定	180俵
③	元禄元・12・21	久下作左衛門重秀	勘定	150俵
④	年月不詳	清水庄九郎定道	不明	不明
⑤	元禄元・12・21	細田三右衛門時春	勘定組頭	250俵
⑥	元禄元・12・21	町野新兵衛某	勘定	不明
⑦	年月不詳	岡田五右衛門俊易	材木石奉行(元勘定)	200俵
⑧	年月不詳	山田十右衛門元定	小細工頭	不明
⑨	年月不詳	比企佐左衛門勝信	支配勘定／小普請／三丸張番	不明
⑩	年月不詳	石原又右衛門政成	不明	不明
⑪	年月不詳	古江左助為利	表火番／徒目付	不明
⑫	年月不詳	正木藤右衛門弘信	勘定組頭	400俵
⑬	年月不詳	山田源左衛門重維	残物奉行／川船奉行	30口
⑭	元禄元・12・21	本間小右衛門正堅	支配勘定	200石
⑮	元禄6・2・6	水野甚左衛門親信	勘定	100俵3口
⑯	元禄6・2・6	真崎伊右衛門清長	支配勘定	不明
⑰	元禄6・2・6	小野寺作右衛門秀成	支配勘定	不明
⑱	元禄元・12・21	能勢平右衛門頼寛	勘定	150俵
⑲	元禄元・12・21	岩出与左衛門某	勘定	150俵
⑳	元禄元・12・21	秋田三郎左衛門政森	勘定	150俵
㉑	元禄6・2・6	荻原甚五左衛門友高	勘定	100俵3口
㉒	元禄元・12?	近藤小右衛門忠明	勘定	100俵3口
㉓	元禄元・12・21	宇田川平兵衛忠成	支配勘定／油奉行	不明
㉔	元禄元・12・21	秋山彦大夫幸常	勘定	不明
㉕	年月不詳	遠藤治兵衛某	小普請(元勘定)	100俵
㉖	元禄元・12・21	青木勘次郎(弥三左衛門信壽?)	勘定	200石
㉗	元禄元・12・21	中川武右衛門直茂	小普請(元勘定)	150俵
㉘	元禄元・12・21	野田源右衛門某	勘定	150俵
㉙	元禄元・12・21	室七郎左衛門重福	勘定	150俵5口
㉚	元禄元・12・21	細田伊左衛門時矩	勘定	150俵
㉛	元禄元・12・21	神尾五郎兵衛(助左衛門茂次?)	小普請(元勘定)	230俵余
㉜	元禄元・12・21	比企儀左衛門某	勘定	150俵
㉝	元禄元・12・21	柘植善九郎正休	勘定	150俵
㉞	元禄元・12・21	平岡市右衛門資明	勘定組頭	200俵
㉟	元禄元・12	伴善大夫政忠	二条蔵奉行(元勘定)	100俵3口
㊱	元禄元・12・21	平岡四郎左衛門道祐	代官(元勘定)	100俵
㊲	元禄元・12・21	井戸平左衛門正明	小普請(父が勘定)	150俵
㊳	元禄元・12・21	平岡彦左衛門道高	林奉行(元勘定)	150俵
㊴	元禄元・12・21	桜井七右衛門政番	勘定組頭	250俵
㊵	元禄元・12・21	望月忠左衛門為直	大坂蔵奉行(元勘定)	150俵5口
㊶	元禄元・12・21	野田彌惣左衛門久忠	勘定	150俵
㊷	元禄元・12・21	河田宇右衛門宜繁	材木石奉行(元勘定)	200俵
㊸	元禄元・12・21	武藤十郎兵衛安利	勘定	150俵
㊹	年月不詳	辻傳五左衛門(辻源五右衛門守衛)	勘定	150俵
㊺	元禄元・12・21	平井太郎左衛門次方	林奉行(元勘定)	150俵
㊻	元禄元・12・21	長谷川庄兵衛長貴	勘定	100俵?口
㊼	元禄元・12・21	古川武兵衛氏成	勘定	150俵
㊽	元禄元・12・21	岡田庄大夫俊陳	勘定	150俵
㊾	元禄元・12・21	石井治大夫定次	漆奉行(元勘定)	150俵
㊿	元禄元・12・21	長谷川甚兵衛安茂	勘定	100俵
51	元禄元・12・21	窪嶋市郎兵衛長敬	勘定(残物奉行・川船奉行兼任)	150俵
52	元禄6・2・6	増嶋佐七郎重信	勘定	150俵
53	元禄6・2・6	竹村彌大夫嘉武	勘定	150俵
54	元禄6・2・6	服部八右衛門保孝	支配勘定／勘定	150俵

番号は図2と対応。白抜き番号は旧「館林藩土」を示す。屋敷受領日は『屋敷証文』、拝領者の諱・役職・家禄高は『寛政譜』による。

拡張している。渋谷は、この添地は寛文元年に倍增した家臣団の宅地確保のために用いられたとするが、妥当な推定であろう。

このことは『場末沿革図書』の該当部分を見るとよくわかる(巻20元上の第6・9・10区画、下の第2～5区画に相当)。図1は「元禄十一寅年之形」(巻20元下第2区画のみ「元禄十一寅年同十二卯年之形」)をもとに作成したもので、実線が元禄11年頃の敷地割、破線が同年に御殿が拡張される以前の敷地割を示している。これによれば、当初の拝領部分とみられる南～南西側に大きな面積を占める街区があり、添地された部分とみられる北～北東側に長方形の街区がとられていることがわかる。この形状からすれば、前者が御殿や庭園からなる、いわゆる「御殿空間」にあたり、後者が「藩士」たちの居住する「詰人空間」にあたっていると考えられる³¹⁾。実際、前者は幕府の小石川御殿に転用され、後者はそのまま旧綱吉家臣団の屋

敷として利用された。この点は『場末沿革図書』巻20元下、第2区画においても次のように記されている(亀甲括弧内は原割注を示す)。

延宝年中は館林殿屋敷内ニ候処、其後天和元酉年中
(徳松) 徳松君様西丸え 御入後、右御屋敷跡地之内当所より西南之方は年月不詳御殿地〔小石川称御殿〕ニ成、右御殿地ニ相成候残地、当所御屋敷跡地之内ニ前々方住居来候者其儘屋敷拝領いたし、且御長屋住居之者も其儘御長屋拝借いたし候儀と相見、天和年中之頃は同所之内ニ夫々道敷有之、東手ニ明地壹ヶ所・御長屋二棟、東南中程同一棟有之、其外惣鉢小屋舗ニ候

この記述について、実際に『場末沿革図書』に記された拝領者名をもとに検討してみたい。表5は、元禄11年時点で小石川下屋敷跡地に名前が見えるなかで、『寛政譜』で履歴が確認できる拝領者計43人を整理したものである。このうち『屋敷証文』などで授受が確認できるのは9人のみで、それ以外のは大半は「館林藩」時代から拝領していた人物と推定できる。実際、34人中⑮、⑳、㉑、㉒、㉓を除く30人は神田屋敷に勤仕していたとの記載を確認できる(例外の4人については、該当の拝領記事が『屋敷証文』の欠年に当たっているか、『寛政譜』の情報に欠落している可能性もあるが、不詳である)。したがって先の『場末沿革図書』の記述は裏付けられたといえよう。

次に、「館林藩」廃藩後に新たに拝領したとみられる9人についてみると、このうち7人も旧「館林藩士」であったことも確認される。残る2人も三丸勤仕者であり、すでに「藩」が解体された後であってもなお下屋敷の跡地には綱吉関係者が集まってきていたことがわかる。この点は『寛政譜』では確認できないものの『屋敷証文』などで役職の判明する小禄の士についても同様であり、綱吉母桂昌院の居所である三丸への勤仕者の拝領事例が多数見られる。

このような旧下屋敷の空間的規定性は屋敷の範囲内のみにとどまらなかった。例えば本節で挙げた旧「藩士」の拝領事例④と⑤でふれた小石川白山における屋敷受領は、旧下屋敷内ではないものの、そのすぐ近隣地での事例であった。旧「藩士」の集住はかつての屋敷の外側にも広がっていたのである。

本所石原蔵屋敷

本所石原蔵屋敷は綱吉が万治3(1660)年に拝領したもので、隅田川左岸に位置している。『場末沿革図書』巻15下第2・3区画の「延宝年中之形」を見ると「館林殿御蔵屋敷」と記されるのみで空白となっており、内部構造は不明であるが、屋敷南境に「入堀」があり、つづく第2区画の「元禄元年辰年之形」・第3区画の「元禄元辰年同録酉年之形」を見ると、南北に三筋、櫛形状の船入が残存していることがわかるので(図2参照)、蔵屋敷の機能からすると、この船入周辺には年貢米などの産物の荷揚げのための空間と蔵、および役所が設けられていたものと推察される。

この蔵屋敷が、綱吉の将軍就任後にいかに変容したかについて検討したい。図2は上述の『場末沿革図書』をもとに、元禄6(1693)年頃の蔵屋敷跡の街区を復元したものである。そしてそこに記される人名のうち、『寛政譜』で履歴の確認できる計54人の拝領者を示したのが表6である。これを見ると、ほとんどの屋敷は元禄元年と6年に割付がなされたものであることがわかる。『場末沿革図書』巻15下第2区画の説明文には、

右一円之地所延宝年中は館林殿御蔵屋敷・徳山五兵衛屋敷等ニ有之由ニ候得共詳ならず、其後御蔵屋敷御取払ニ成候由、元禄

元辰年十二月御蔵屋敷跡地之内ニ而、久下作左衛門……

と見え、蔵屋敷にあった諸建造物はいったん撤去され、元禄元年12月に跡地に屋敷の割付が行われたことがここでも示されている。

一方で屋敷授受の年月日が確認されない拝領者も10人確認されるが、例えば④の清水と⑦の岡田は上掲の史料において、

同所(引用者注:弁天社地)続ニ而年月詳ならず岡田五右衛門并前書細田三右衛門屋敷続ニ而清水庄九郎兩人屋敷ニ成、と記され(原文割注省略)、他も同様に「年月不詳」の拝領とされていること、小石川白山屋敷のように旧「藩士」がそのまま屋敷内居住を継続した旨の文言が見えないことから、拝領の記録が欠落した結果であると解しておきたい(表6では屋敷受領日を「年月不詳」として、表5の場合と区別する)。

このように、本所石原蔵屋敷は綱吉の将軍就任後に一度解体され再開発されるという道を辿ることになったが、これは単に「館林藩」が廃藩になったことによるのみならず、第3節でふれたような、天和2(1682)年～貞享5(1691)年の本所撤退策も大きな要因として働いていたと考えられる。

興味深いのはこの新たに開かれた屋敷地を拝領した幕臣である。すなわち、表6の54人のうちのほとんどが勘定方またはその出身者であり、また6割弱にあたる32人は旧「館林藩主」であったという点である。蔵屋敷は領内の年貢米や特産物を貯蔵販売する場所であり、「館林藩」時代には勘定方の家臣が多く勤仕していたと推測されるが、その蔵屋敷が解体され新たに再開発されるという過程を経てもなお、その跡地は旧「藩士」を多く含む勘定方幕臣の集住地に立ち返ることとなったのである³³⁾。

5. 綱吉政権と武家地

本稿では、徳川綱吉政権期を対象として、江戸の武家屋敷に対してどのような政策がとられてきたかを概観し、とくに綱吉の将軍就任にともなって幕臣に編入された家臣たちの屋敷がどう扱われてきたかについて考察してきた。その要点は以下のようにまとめられる。

- ① 将軍就任前の徳川綱吉は上野館林に25万石を与えられた家門大名であった。家臣の約6割は幕府からの附属者で、形式上では「藩士」でありながらも幕府からの出向者としての側面も持ち、一般の幕臣と同様に江戸に独立した屋敷を拝領する者もいた。
- ② 延宝8(1680)年に綱吉が徳川宗家を継ぐと、その家臣団も幕臣に編入されるが、天和3(1683)年までは「館林藩」は形式的に残されたため、ほとんどの家臣は幕臣でもあり「館林藩士」でもあるという二重身分状態におかれていた。
- ③ そのため、綱吉家臣団は一部の側近層を除けば基本的にかつての館林家屋敷(主として小石川白山下屋敷)の屋敷をそのまま拝領屋敷として居住を続けていた。本所石原蔵屋敷はいったん解体されたが、元禄元(1688)年に再度屋敷割がなされ、旧「藩士」を多く含む勘定方の屋敷地となった。こうして、「館林藩」が消滅した後であっても、小石川と本所の屋敷跡とその周辺は旧「藩士」が多く集まる屋敷地として再編されたのである。
- ④ 綱吉政権では天和2(1682)年に本所撤退策を発するなど、当初は江戸の範囲を集約する方針を打ち出していたが、貞享5(1688)年にこの政策を撤回する。その後は逆に災害などを契機とした武家屋敷の周縁部への移転事例も散見されるようになり、

江戸のスプロールが進展していく。旧「藩士」にはこうした周縁部に屋敷を拝領した者も少なからず確認された。

最後に、綱吉と同様に養子となって将軍職を継いだ家宣と吉宗のときの家臣団の編入と屋敷付与のあり方と比較してまとめにかえたい。

綱吉の場合と近いのは家宣の事例である。家宣はもと綱豊といい、父綱重から甲府25万石（のち延宝8〔1680〕年に10万石加増）を継承していた。この「甲府藩」も家臣の多くが幕府からの附属者であり、一部の家臣は江戸に独立した屋敷を拝領していたなど、「館林藩」ときわめて類似した性格を有していた。

綱豊の場合、養子になってから実際に将軍を継ぐまでに4年以上の移行期間があり、西丸に入った段階で「甲府藩」は廃藩になったという点で綱吉の場合と異なっている。ただし幕臣に編入された家臣団の屋敷の動向については綱吉の場合と同様に甲府家屋敷跡が彼らの居住の受け皿として機能しており、それ以外では市中で生じたまとまった上がり地などが活用されていた。

一方でこれらと異質なのが吉宗の事例である。吉宗は正徳6（1716）年に和歌山藩から徳川宗家を継いだが、このさい彼は200名余の家臣団を選んで江戸に供奉した。そのため綱吉や家宣の場合と比べて編入される家臣団の規模は小さいが、問題は和歌山藩を残存させたために江戸に移住させる家臣団の居住の受け皿がなかったことである。したがって吉宗政権の成立期には、とくに側近層を中心に屋敷地の強権的な置き換えが行われることになる。

このように養子としての将軍家継承と家臣団編入という共通性をもちながらも、その編入家臣団の屋敷地の動向には差異があり、そこには政権の形成過程やそれぞれの時代の江戸武家地の状況も大きく関わっている。政権交代と武家屋敷の関係については、18世紀以降の構造的変容³⁴⁾も見据えながらさらに事例研究を行っていく必要があるが、今後の課題としておきたい。

謝辞

英文要旨・要約作成にあたっては明石工業高等専門学校のピチニニ東野アドリアナ氏のご協力をいただきました。また本研究はJSPS科研費24360255の助成による成果の一部です。ここに記して感謝いたします。

注

- 1) 明治2（1869）年の調査による。宮崎勝美「江戸の土地——大名・幕臣の土地問題」吉田伸之編『日本の近世9 都市の時代』（中央公論社、1992年）、130頁。
- 2) 鈴木賢次「旗本住居の都市における存在様態」『建築史学』第2号（1984年）、宮崎勝美「江戸の武家屋敷地」高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ 空間』（東京大学出版会、1989年）、同上宮崎論文。
- 3) 武家地に関する研究史整理としては、藤川昌樹『近世武家集団と都市・建築』（中央公論美術出版、2002年）、岩淵令治『江戸武家地の研究』（塙書房、2004年）がある。なおこれ以降の重要な研究書としては、江戸遺跡研究会編『江戸の大名屋敷』（吉川弘文館、2011年）、作事記録研究会編『大名江戸屋敷の建設と近世社会』（中央公論美術出版、2013年）などがある。
- 4) 松本剣志郎「若年寄役屋敷の交替拝領と武家社会」『白山史学』第42号（2006年）、同「土浦藩江戸屋敷について——老中役屋敷の成立」『土浦市立博物館紀要』第23号（2013年）。
- 5) 深井雅海『江戸城——本丸御殿と幕府政治』（中公新書、2008年）は、幕

府政治のありようを江戸城の空間構造との関連で解き明かしている点で注目されるが、この議論をいかに都市スケールまで広げるかが課題となる。

- 6) 拙稿「紀州藩士の幕臣化に伴う江戸屋敷獲得動向」『日本建築学会計画系論文集』第561号（2002年）、同「武家地の空間とその流動性——徳川家宣政権期を事例として」近藤和彦・伊藤毅編『江戸とロンドン』（山川出版社、2007年）、同『江戸の政権交代と武家屋敷』（吉川弘文館、2012年）。
- 7) 上記拙著では綱吉政権初期（貞享期まで）の動向について簡単にふれているが、本稿は綱吉政権全体を対象としてより詳しい分析を行うものである。
- 8) 『常憲院殿御実紀』など公的史料では通常四男とされるが、福田千鶴は「長子」家綱誕生前の寛永9（1632）年2月に男子が生まれたものの間もなく薨じた事実があったことを指摘している。福田『徳川秀忠——江が支えた二代目将軍』（新人物往来社、2011年）、126～128頁参照。
- 9) 以上は『常憲院殿御実紀』巻一による。刊本『徳川実紀』第五篇（吉川弘文館、1976年）、353頁。
- 10) 深井雅海『徳川将軍政治権力の研究』（吉川弘文館、1991年）、第2編第1章（初出1977年）参照。
- 11) 国立公文書館内閣文庫所蔵。
- 12) 国立国会図書館所蔵。
- 13) 筆者は以前に御三家の一つである水戸藩を事例として、藩主が江戸定府であったために江戸に常住する藩士がしだいに増加し、城下町水戸の空洞化が進んでいく過程を論じたが、「館林藩」はそのさらに極端な事例といえる。拙稿「水戸藩における定府進展に伴う城下町および江戸藩邸の変容」『日本建築学会計画系論文集』第560号（2002年）参照。
- 14) 前注10深井書、161頁。
- 15) 『東京市史稿』市街篇の巻と頁を示す。以下同様。
- 16) 前注10深井書、161頁。
- 17) この点は3代将軍家光の弟忠長の家臣団、綱吉の兄綱重の家臣団とも共通する。前注6拙著、43～44、87頁参照。
- 18) 元禄6（1693）年に本所奉行が復活したことによるものか、元禄7年～正徳3（1713）年の写本では「本所之部」が他の地域と分けてまとめて掲載されている。
- 19) 龍之口と大名小路の一部、本所の横川以東、堅川以南、深川全域を欠く。
- 20) 『甲子夜話』では享保7（1722）年時点での大名・旗本・御家人の総人口を22,868人としている。
- 21) 『常憲院殿御実紀』巻五、前注9刊本、440頁。
- 22) 前注6拙稿2007年論文。
- 23) 『常憲院殿御実紀』巻一、前注9刊本、355頁。
- 24) 前注10深井書、166～167頁。
- 25) 同上、167～170頁。
- 26) 『天和日記』ほか。『東京市史稿』皇城篇第2（東京市、1912年）、362頁。
- 27) 『常憲院殿御実紀』巻六、前注9刊本、464頁。
- 28) 『常憲院殿御実紀』巻廿三、元禄4（1691）年2月3日条に「佐藤三左衛門信勝は神田御殿番となり……」とあるのが初見であるが、同役職の設置時期については不詳。刊本『徳川実紀』第六篇（吉川弘文館、1976年）、97頁。
- 29) 本節での旧「藩士」屋敷の検討からも明らかなように、この柳沢の神田御殿拝領前後に旧「藩士」の目立った屋敷拝領の動きは見られない。したがって少なくとも神田御殿の末期には旧「藩士」はすでにほとんど居住していなかったとみるべきであろう。
- 30) 渋谷葉子「『小石川植物園』の土地利用に関する歴史的変遷」『東京大学構内遺跡調査研究年報』第5号（2006年）。
- 31) 「御殿空間」と「詰人空間」の二元性については、吉田伸之『巨大城下町江戸の分節構造』（山川出版社、1999年）補論4（初出1988年）を参照。
- 32) 例えば注28で挙げた神田御殿番佐藤三左衛門信勝は旧「館林藩士」ではなく、幕府神田御殿勤仕者と「館林藩」神田屋敷勤仕者とは必ずしも重ならないことに注意を要する。
- 33) なお表6の旧「藩士」が本所に屋敷を拝領する前の居所については記録が見られない。本所撤退期においては神田屋敷などが受け皿となった可能性もあるが、不詳である。
- 34) 山端徳がすでに指摘しているように、幕府による拝領屋敷の下賜は享保期を劃期として減少に向かうといい、幕府政治動向と武家屋敷との関係にも変化が生まれてくると予想される。山端「江戸幕府の拝領武家屋敷下賜の実態」竹内誠監修・大石学編『都市江戸への歴史視座——大江戸八百八町展・武家拝領地・江戸首都論』（名著出版、2004年）参照。

RELATION BETWEEN SAMURAI LAND (BUKECHI) POLICY AND SHOGUN'S RETAINER ADMISSION DURING TOKUGAWA TSUNAYOSHI GOVERNMENT PERIOD

Kaoru IWAMOTO *

*Lect., Faculty of Design and Architecture, Kyoto Institute of Technology, Dr. Eng.

This paper analyses the samurai residence policy during the Edo Shogunate 5th General, Tsunayoshi Tokugawa administration period (1680 through 1709). The Historical materials used in this analysis were the record of Samurai residence land movement, Edo illustrated map and the Edo Shogunate retainers genealogies.

Tokugawa Tsunayoshi was born in 1646, as the younger brother of the 4th Tokugawa Shogun Tokugawa Ietsuna. In 1661 Tsunayoshi received the Kozuke Province and became the feudal lord of the Tatebayashi clan, wealth of 25,000 *Koku*. Since he was the Shogun nearest relative, Tsunayoshi and most of his vassals lived in Edo. Approximately 60% of his vassals were attached by the Shogunate, and although at that time formally they were retainers of the Tatebayashi clan many of them originally were Shogunate retainers. Tsunayoshi's Tatebayashi clan vassals were treated almost as a regular Shogunate retainer, and some of them even received an independent residence in Edo.

In 1680 Tsunayoshi's elder brother Ietsuna adopted Tsunayoshi because he was childless and his health in a critical condition. Consequently Tsunayoshi was now the heir of Edo Shogunate. Tsunayoshi became Shogun and his son, Tokumatsu was the new feudal lord of the Tatebayashi clan. Most of Tsunayoshi former vassals were admitted as Shogunate retainers, and since the Tatebayashi clan still existed, many vassals were both Tatebayashi clansman and shogun's retainer. Therefore when Tsunayoshi became Shogun only a few number of vassals, the one closest to Tsunayoshi, received a new residence in Edo, most of his vassals continued to live in their former residences.

As a feudal lord of the Tatebayashi Clan Tsunayoshi received three residences: a *Kamiyashiki* (main residence) in Kanda, a *Shimoyashiki* (Suburban residence) in Koshikawa-Hakusan and a *Kurayashiki* (warehouse residence) in Honjo-Ishihara. Among these residences the *Shimoyashiki* in Koshikawa-Hakusan was probably the one to lodge the bigger number of vassals, which would continue to live there even after they became shogun's retainers. The *Kurayashiki* in Honjo-Ishihara was demolished after Tsunayoshi became shogun. The warehouse residence was on the east bank of the river Sumida, and its function was to store land tax rice. After that, in 1688 the area was re developed as residence land for accounting officers, some of which were former Tatebayashi Clansmen. Despite the fact that, with the death of Tokumatsu in 1683 the Tatebayashi clan was abolished, several former vassals continued to live in the area near the Koshikawa-Hakusan *Shimoyashiki* and the Honjo-Ishihara *Kurayashiki*.

What happened with Tsunayoshi residences is related to all Samurai land transformation in the whole city of Edo. When Tsunayoshi became shogun he tried policies to reduce the urbanized area of Edo but soon he was forced to give up. As a result the urbanized area of Edo spread incredibly, and the area of Samurai's houses on the suburbs spread too. As we have seen many of the former vassals of Tsunayoshi received residences on this newly urbanized area. In conclusion through the analyses of the change on Samurai's residence land this paper clarifies the relation between Tsunayoshi's government policies and Edo urban development.

(2014年9月4日原稿受理, 2015年2月5日採用決定)